岡山大学大学院教育学研究科研究集録　第191号（2026）93－100

制作者と造形物の対話を捉える視点の研究

―バフチンに基づく質的な考察のための文献の検討―

大平　修也[*1]

本研究では，制作者が造形行為の過程で実践する造形物との対話に着目し，造形行為において制作者に経験される学びを捉え質的に考察するための視点を，バフチン(Михаил Михайлович Бахти́н)の対話の概念に立ち検討した。まず，対話の過程でつくられる自己と他者の「相互作用，相互関係」について検討し，対話の過程において個々の「世界」が確立されると共に，確立された個々の「世界」が自己と他者の間で共有されることを検討した。次に，造形行為の過程で，制作者が素材を変化させていくにつれて，その造形物ないし作品のもつ形や色が，想像の世界，モチーフ，何らかの規則性などを纏っていく，制作者と造形物ないし作品との対話が実践されることを検討した。研究の成果として，造形物との対話の過程で制作者に経験される学びを捉え質的に考察するための視点である芸術的行為を提示した。

キーワード：対話，芸術的行為，自己，他者，相互関係または相互作用

Ⅰ．問題の所在及び目的

1．問題の所在

本研究では，制作者が造形行為の過程で実践する造形物との対話に着目し，造形行為において制作者に経験される学びを捉え質的に考察するための視点を文献により検討する[1)]。

対話と学びが関係した概念として，文部科学省は「対話的な学び」をあげ，この「対話的な学び」を「子供同士の協働，教職員や地域の人との対話，先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ，自己の考えを広げ深める」学びと解説し，その例の1つとして，「子供同士の対話に加え，子供と教員，子供と地域の人，本を通して本の作者などとの対話を図る」(文部科学省，2017，p.23)活動を示している。つまり，実際に学校で学ぶ「子供同士の対話」だけでなく，「子供と教員，子供と地域の人」といった，子どもと多様な大人による対話，及び子どもと文字や作品(物語，音楽，造形物，など)との対話も「対話的な学び」の範疇に入るといえる。この「対話的な学び」に傾倒し，本研究では，造形行為の過程で，制作者が造形物をつくり変えながら，その造形物と対話していく学びに着目する。本研究では，制作者が造形行為の過程で変化させていく造形物の形や色と，その形や色の状態に応じて変化する表情，行為，発話，などといった制作者のふるまいとの相互作用によって，制作者自身が「自己の考えを広げ深める」学びの過程を，制作者と造形物が質的に関わり合う対話と位置付ける。

Study of Perspectives That Capture the Interaction between Artists and Their Artistic Acts: Literature Research for Qualitative Considerations based on the Theories of Mikhail Bakhtin

[*1] 岡山大学学術研究院教育学域　700-8530　岡山市北区津島中 3－1－1, Shuya OHIRA, Faculty of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530

表１　バフチンの対話の概念に立ち造形行為や鑑賞行為を事例として検討した先行研究

(A)美術館を舞台とした鑑賞行為や造形行為の事例を分析し考察した研究２件。
(A-1)5 歳児が，美術館で実施された展覧会の展示作品に対して鑑賞行為を行なったのち，その美術館に隣接する公園でドングリ遊びの造形行為をした事例から，鑑賞行為を通して幼児が語り合う対話の作用を検討した研究(大平・松本，2020)。
(A-2)高校生が金鎚で叩いてつくった造形物を，美術館の来館者が触れたり持ったりして鑑賞し合った場面を事例とし，来館者が高校生の経験した造形物の触り心地を共有すると共に，鑑賞行為の経験に基づいた造形物の新たな価値や意味を創造する来館者の学びについて検討した研究(大平・茂木・松本，2021)
(B)中学校を舞台とした描く行為の事例を分析し考察した研究１件。
(B-1)靴を鉛筆で描いた画用紙に対して，その靴から感じとった印象を絵具の色と形で覆ってから，絵具で隠れた靴の形を改めて絵具を使い書き起こした中学校第１学年の美術の授業を事例とし，生徒が描く道具や描いた色や形と対話する過程について，バフチン(Михаил Михайлович Бахти́н)の対話の視点から検討した研究(松本・大平，2023)。

対話と学びについて述べている研究者に佐藤がいる。佐藤は，対話が，「自己と他者，個人と社会との間の相互関係，相互作用」(佐藤，2014，p.46)として実践されるものとし，児童を例にして，「特に低学年の時期では，教師との一対一の直接的対話を求める」が，「子どもは発話とフィードバックを通して，学校の世界，学問の世界，文化の世界が何であるかを確定していこうとする。いわば，世界投企を行っている」(佐藤，2014，p.48)とする。

佐藤の述べる子どもの「対話」は，「発話とフィードバック」により「世界投企」を実践する過程といえる。

佐藤は，自身の「相互作用から生まれたものを個人という内部にだけ閉じ込めてしまうのではなく，共同的知識や経験として共同体や社会の中で共有化され，それがまた個人の心理発達に内実を与え，社会的相互作用の展開に制約を与えていく」とする。また，佐藤は，「社会・文化も決して固定的なものではなく，動きがあるもの」であり，「それを作り，動かしているのは私たちの協同的活動なのである」(佐藤，2014，pp.52-53)とする。

佐藤が述べる子どもの「対話」の過程は，個々の子どもの学びが「共同的知識や経験として共同体や社会の中で共有化」すると共に，個々の子どもの「心理的発達」や，集団の行為としての「社会的相互作用の展開に制約を与えて」いき，「社会・文化」を「作り，動かして」いく学びが「協同的活動」を通して経験されるといえる。また，佐藤は，以上の対話の解釈を，「他者の存在と役割」として示したバフチン(Михаил Михайлович Бахти́н)の「対話性」(佐藤，2014，p.12)に基づいて述べている。

佐藤を継承し，本研究では，バフチンに立つ，制作者と造形物の対話に着目して検討する。バフチンの対話に着目している造形行為や鑑賞行為にかかる先行研究には表１の(A)(B)がある。先行研究では，幼児，中学生，高校生に着目した事例を，バフチンの文献に基づいて分析し考察した事例研究はあるが，バフチンの文献に依拠し，造形物との対話の過程で制作者に経験される学びを捉え質的に考察するための視点に焦点化して検討した研究はみられない。本研究では，造形物との対話の過程で制作者に経験される学びを捉え質的に考察するための視点について，バフチンの文献に基づき検討する点に独自性がある。

2. 研究目的

本研究では，次の２つを目的とする。(i)バフチンが述べる対話の概念の整理。(ii)造形物との対話を通した制作者の学びを捉え質的に考察するための視点の検討。

3. 研究方法

本研究は，次の２つの方法で実施する。(a)バフチンが述べる対話の概念の検討。(b)バフ

チンの対話の概念に立つ，造形物との対話の過程で制作者に経験される学びを捉え質的に考察するための視点の提示。

II. 文献の検討

1. バフチンの対話の検討

(1) 対話の過程でつくられる自己と他者

バフチンは,「真理とは一人一人の人間の頭の中に生まれ，存在するものではなく，ともに真理を目指す人間同士が対話的に交流する過程において,人々の間に生まれてくるもの」(バフチン，2002，p.226)とする。

バフチンは，自己と他者が「対話的に交流する過程」において形成していく互いの関係や，相互に共有していく経験として生み出されるものを「真理」と捉えていたといえる。

バフチンは,「自己の対象に向かう言葉は，他者の言葉，評価，アクセントが対話的にうずまいている緊張した環境に入ってゆき，その複雑な相互関係の中に織り込まれ，ある言葉とは合流し，ある言葉には反発し，またある言葉とは交差する」と述べる。この「対話」の特性について，バフチンは,「本質的に言葉を形成し，あらゆる意味の諸層の中へと沈殿して，その表現を複雑にし，文体のあらゆる相貌に影響を与える力を持っている」ため，「言葉の社会的情況が言葉の形象(イメージ)の境界面に光の戯れをおこさせるのだ」(バフチン, 1996, pp.40-41)とする。また，バフチンは,「生きた言表というものは，ここから，すなわちこの対話から，その継続として，応答として生まれるものであって，いずれかの第三者の立場から対象に接近するものではない」のであり,「言葉は自己の意味と自己の表現とに，様々なアクセントをになった他者の言葉という媒体を通過することによって近づき，この媒体の様々な諸要素と共鳴したり反発したりしながら，このような対話化された過程の中で自己の文体の相貌と調子(トーン)との形式化を可能なものとする」(バフチン，1996，pp.40-41)と述べる。

対話の過程では，自己と他者の「相互関係，相互作用」が「交差」したり,「反発」したり,「合流」したりするが，この対話の特性が,「相互関係，相互作用」としての自己と他者の「言葉を形成」すると共に，自己と他者の「相互関係，相互作用」を豊かで複雑な表現として繰り返し実践させるといえる。また，この「相互関係，相互作用」は，実際に対話し合う自己と他者の関わりの過程として生じるものであり，その対話に参与していない「第三者の立場」から，対話において生み出される「真理」を共有することは難しいといえる。

対話の過程としての，自己と他者の「相互関係，相互作用」を活性化させることが，自己と他者の表現を「光の戯れ」のように活性化させると共に，自己と他者の表現の「相貌と調子(トーン)」を鮮明なものに昇華させていく契機になるといえる。

バフチンは,「いかなる他人に対してもつねに保たれる，わたしの見る眼，知識，所有のこの余裕は，世界におけるわたしの位置が唯一で，代替不可能なことに起因する。(中略)。唯一人のわたしと，わたしにとって例外なしに他者であるすべての人々とのあいだのこの具体的な外在の関係，およびこの外在の関係に起因する，かれら銘々に対するわたしの見る眼の余裕」(中略は筆者)は,「単一の一般的に意義ある世界を構築する認識によって克服される」とする。また，バフチンは,「単一の一般的に意義ある世界」は,「それぞれの個人が占める具体的な唯一の位置からは，あらゆる点で完全に独立したものである。この認

識にとっては,〈わたしとすべての他者〉という絶対的にかけがえのない関係もまた存在しない。認識にとって〈わたしと他者〉は，それが思考の対象とされるかぎり，相対的で交換可能な関係となる」(バフチン，1999，p.146)とする。

対話の過程では，自己と他者の「相互関係，相互作用」が「唯一で，代替不可能」な個々の表現として実践されることにより，自己と他者が「世界」において確立されていく。それは，すなわち，自己と他者が確立されるためには，自己である「唯一人のわたし」と，自己にとっての「他者であるすべての人々とのあいだのこの具体的な外在の関係」である「相互関係，相互作用」が不可欠であり，自他の対話の過程としての，自己と他者の「相互関係，相互作用」を通して互いが捉えている「単一の一般的に意義ある世界」を個々が認識しているといえるが，それと同時に，個々が認識している「単一の一般的に意義ある世界」は，対話の過程における自他の表現を通して自己と他者の間で「相対的で交換可能」な「思考の対象」であるともいえる。

(2)対話の要素をもつ芸術である「芸術的行為」

以上は，人間同士の対話に対する考察だが，芸術の行為の過程として実践される，人間と人間以外の「対象」との対話の場合はどうであろうか。

バフチンは，詩を例にして,「美的に意義あるものはすべて，空虚を孕んでいるのではなくて，行為する生の強固な自律性をもった(美的には説明しえない)意味的な指向性を孕んでいる」とし,「作家は，決して始めから作家として始めるのではない。すなわち，始めから美的な要素とのみかかわるのではない。(中略)。作家が始めから美的な量とかかわるばあいには，何ものも克服せず，本質的にいかなる価値的な重みもつくりださない，作りものめいた空疎な作品ができあがる。徹頭徹尾，純粋に美的な要素のみによって主人公を創造することはできない」(中略は筆者)(バフチン，1999，p.357)とする。バフチンは,「作者が芸術家として前もって見いだすのは,所与としての主人公(作者の純粋な芸術的行為からは独立した)」であるとし，この「主人公」は「所与」としての「他者たる人間」の特性をもつが,「この所与こそが,芸術家としての作者によって前もって見いだされるのであり」,「所与」との関係から作品としての「美的完結は価値的な重みをもつのだから」とする。バフチンは,「芸術的行為は何らかの頑強な(弾力性のある，不透明の)実在と出会う」行為であるから,「芸術的行為」の過程で「出会う」，作品に込められた「美学外的な実在」としての「主人公―もう一つの意識―のこの実在こそが，芸術の見る眼の対象なのであり，その見る眼に美的な客観性を付与するのである。もちろんそれは，作者の自由な創造的空想の対極をなす自然科学的な実在(物理的と心理的とを問わない現実および可能性)ではなくて，生の価値的・意味的な指向性がもつ内的な実在」であると,「美的な客観性」について解説する。バフチンは，作品を見る者は「認識上の実在でも，経験的，実践的な実在でもなく，できごととしての実在(物理的なではなく，できごととしてのあり得べき動き)を要求するのである。それが生のできごとになるのは，価値的な重みという意味でなのである」(バフチン，1999，p.358)とする。

造形行為においてつくられた作品の場合，その作品は元となった素材やつくり途中の造形物とは異なる「生の強固な自律性をもった(美的には説明しえない)意味的な指向性を孕んでいる」といえる。造形行為の場合は，使用される素材が，はじめから「美的に意義」を持ち「価値的な重み」をもっているのではなく，制作者が造形行為を実践していく過程で「価値的な重み」を持つに至るといえる。詩の場合は，言葉を紡ぎ出していくことで，

その言葉が「所与としての主人公」として立ち上がっていくが，造形行為の場合は，制作者が素材を変化させていくにつれて,その造形物ないし作品のもつ形や色が,想像の世界，モチーフ，何らかの規則性などとして,「所与としての主人公」と同等の「価値的な重みをもつ」に至り,「美的完結」の性質を獲得していく。それは，制作者が，素材を造形物へと変化させていったのち,造形物を作品としての「美的完結」へと変化させていくといった，制作者と造形物ないし作品との対話の過程でつくり出されていく性質といえる。また，こうした，制作者と造形物ないし作品との対話の過程は，形や色として表現できる，想像の世界，モチーフ，何らかの規則性などといった「何らかの頑強な(弾力性のある，不透明の)実在と出会」っていく「芸術的行為」であり，造形物ないし作品に宿っていく(宿った)「美学外的な実在」を，制作者が「芸術の見る眼の対象」として捉えていく芸術の実践の過程といえる。この芸術の実践の過程，すなわち，造形行為における制作者と造形物ないし作品との対話の過程において，造形物ないし作品は「生の価値的・意味的な指向性」を「美的な客観性」として獲得していき,「生のできごと」と形容可能な力強さや美しさを纏っていくといえる。

バフチンは,「価値的な重みという意味」により,「芸術上の蓋然性，客観性，すなわち，対象―人間の認識的・倫理的な生の指向性―への忠実さ，主題，性格(キャラクター)，状況，抒情的モティーフ等の本当らしさ」が「測られる」ため,「われわれは作品のうちに，存在がもつできごととしての実在の，生きた抵抗を感じ取らなくてはならない」とし,「この抵抗がないところ，世界の価値的なできごとへの活路が存在しないところでは，作品はつくりものめいて，芸術的にまったく説得力を欠いたものとなる。もちろん，美的な客観性を見分けるための客観的な，一般的に意義ある基準というものはあり得ない。そこにあるのは直感的な確かさだけである」とし,「芸術上の形式(フォルム)と完結をかたちづくる外在的な諸要因の背後に，われわれはあり得べき人間的な意識を生き生きと感じ取るのでなければならない(この意識にとって，それらの要因は外在的である。この意識を，それらの要因は慈しみ完結させるのだ)。(中略)。それを感じ取ることはすなわち，フォルムを，フォルムがもたらす救済を，フォルムの価値的な重みを―美を感じることなのである」(中略は筆者)とする。そのため，バフチンは,「フォルムを自分自身に帰することはできない。フォルムを自身に帰するとき，わたしたちはみずからに対して他者になる。つまり自分自身であること，自分の内側から生きることを止めて，他人に心を占められた者になる。ちなみに，芸術のすべての部門にみられるこうした傾向(もちろん，きちんとしたものでない)が，ある種の抒情詩や音楽をのぞいて，フォルムのもつ重要な意義や価値的な重みをそこなうのである」(バフチン，1999，pp.358-359)とする。

詩の場合は，執筆の過程において，文章が「忠実さ，主題，性格(キャラクター)，状況，抒情的モティーフ等の本当らしさ」を獲得していくが，造形行為の過程では，造形物ないし作品のもつ形や色が，想像の世界，モチーフ，何らかの規則性などといった「芸術上の蓋然性，客観性」や「実在」としての「生きた抵抗」を纏っていく。これによって，造形物ないし作品は，他の造形物ないし作品との関係や差異をもち「世界の価値的なできごとへの活路」を開いていくが，これとは逆に,「生きた抵抗を感じ取」れず,「世界の価値的なできごとへの活路」が開いていない造形物ないし「作品はつくりものめいて，芸術的にまったく説得力を欠いたものとなる」といえる。しかし，造形物ないし作品のもつ形や色が纏う「芸術上の蓋然性，客観性」や「実在」としての「生きた抵抗」を「見分けるための客観的な，

一般的に意義ある基準というもの」はなく,「直感的な確かさ」でしか「測られ」ないため，その「直感的な確かさ」を造形行為(または鑑賞行為)における造形物との対話を通して洗練させていき,「芸術上の形式(フォルム)と完結をかたちづくる外在的な諸要因」，すなわち，形や色に対して,「われわれはあり得べき人間的な意識を生き生きと感じ取る」力を身に付けていくことが肝要といえる。この力こそが，造形物ないし作品の「フォルムがもたらす救済を，フォルムの価値的な重みを―美を感じること」なのであり，感性を働かせることだといえる。そして，この感性を働かせながら洗練させていく営みは，制作者自身が「自分自身であること」，すなわち，制作者が自ら見方，感じ方，考え方を働かせて，造形物との対話を実践していく過程として営まれるといえる。

バフチンは,「芸術のできごとには二人の参加者がいる。一方は受動的に実在する者，他方は能動的な者である(作者＝観照者)。どちらの参加者が抜けても芸術のできごとは崩壊し，わたしたちには芸術のできごとの悪しきイリュージョン―虚偽(芸術的な自己欺瞞)だけが残される。芸術のできごとは実態のないものになり，真に成就されたものではなくなる。芸術的客観性―それは芸術的な思いやりである。思いやりは，対象を抜きにしてはありえない」とする。バフチンは,「ある種の芸術は，対象を持たないといわれる(図案装飾，アラベスク，音楽)。これは，そこに一定の対象内容，分化し画定された内容が存在しないという意味では正しい。しかし，われわれがいう意味での対象,〔作品に〕芸術的客観性を付与するものとしての対象は，もちろん存在している。ありうべき純粋な生の状態での，自分の内側からは完結されない意識，その頑強さを，わたしたちは音楽のうちに感じる」(バフチン，1999，pp.359-360)とし,「ある種の芸術」における「対象」の「存在」について「音楽」を例に述べる。

造形行為における，制作者と造形物ないし作品との対話の過程でつくり出された，造形物ないし作品のもつ形や色が纏った「芸術上の蓋然性，客観性」や「実在」としての「生きた抵抗」は，作品のもつ形や色を介して，造形行為を越境し，鑑賞者への鑑賞行為へと接続していくといえる。それは，制作者である「能動的な者」と，作品のもつ形や色を見たり，使ったり，味わったりする鑑賞者としての「受動的に実在する者」との，作品を介した「相互関係，相互作用」といえる。作品を介した，制作者と鑑賞者の「相互関係，相互作用」は，その作品のもつ形や色が「芸術上の蓋然性，客観性」や「実在」としての「生きた抵抗」を纏っているからこそ実践される「芸術のできごと」であり，制作者と鑑賞者の対話と換言できるといえる。しかし，作品のもつ形や色が,「芸術上の蓋然性，客観性」や「実在」としての「生きた抵抗」を纏っていないにも関わらず，鑑賞者が自らの知識に傾倒した作品への感想や評価を述べるに留まり，作品を介して何も感じられず，捉えることができていないのならば，それは「芸術のできごとの悪しきイリュージョン―虚偽(芸術的な自己欺瞞)」を鑑賞者が実践しているに過ぎないといえる。

バフチンは,「主人公とその世界に形式を付与して完結させる手法と，これに規定された，素材を仕上げて適応させる(内在的に克服する)手法―この統一を，われわれはスタイルと名づける」とし，以下の 2 つの条件により,「スタイルの確固たる統一(大きな力強いスタイル)が可能」になるとする。(ⅰ)「生の認識的・倫理的な緊張の統一が存在すること，生を支配する課題が議論の余地なきものであること」，(ⅱ)「外在の立場が確固として議論の余地なきものであること(それは結局，以下で見るように，生が孤立したものでないこと，生が緊張して自身の内側から働くのは価値的な空虚さのうちでではないことへの，宗教的

な信頼である)」。この「二つの条件は緊密にむすびついていて，相互に制約しあっている。大きなスタイルは芸術の全領域を包むものである。そうでないと芸術は存在しない。なぜなら，大きなスタイルとは何よりもまず世界を見る眼そのもののスタイルであり，ついで，素材を仕上げるスタイルなのだから」(バフチン，1999，pp.361-362)とバフチンは述べる。

「芸術的行為」は造形行為や美術領域だけに留まらず，芸術全般において実践され得る対話といえる。そのため，芸術全般，すなわち，「ある種の芸術」においてつくられる作品の，形や色，音，香り，手触り，味などを「対象」として経験する「外在の立場」から，「生の認識的・倫理的な緊張」を生み出していく「芸術的行為」は，特定の教科だけでなく領域横断的に「芸術」と関わることの可能な「全領域」を包摂すると共に，「全領域」へとつながる新たな「生」の関係，すなわち，「相互関係，相互作用」を形成すると共に，その「相互関係，相互作用」そのものを捉える見方，感じ方，考え方といった「世界を見る眼」であって，その「世界」を捉えようとする「大きなスタイル」であって，自己と他者，自己と「対象」との対話において人間に経験される学びを捉えることの可能な視点であるといえる。

III．造形物との対話の過程で制作者に経験される学びを捉え質的に考察するための視点

前述では，造形行為の過程で，制作者が素材を変化させていくにつれて，その造形物ないし作品のもつ形や色が，想像の世界，モチーフ，何らかの規則性などを纏っていく，制作者と造形物ないし作品との対話が実践されると考察した。また。造形行為を通して，作品のもつ形や色が纏った「芸術上の蓋然性，客観性」や「実在」としての「生きた抵抗」は，その作品を見たり使ったり味わったりする鑑賞行為によって鑑賞者が捉えていく，制作者と鑑賞者の「相互関係，相互作用」が，制作者と鑑賞者の対話として実践されることを考察した。さらに，これらの，造形行為を契機とした制作者と「対象」の対話，及び制作者と鑑賞者の対話は，芸術全般において実践され得るものであり，造形行為や美術領域だけに留まらない，芸術全般において実践され得る「芸術的行為」の一端であると共に，それらの対話を捉える見方，感じ方，考え方としての「世界を見る眼」であることを考察した。

以上から，本研究では，造形物との対話の過程で，素材を変化させていきながら，その造形物ないし作品のもつ形や色に対して，想像の世界，モチーフ，何らかの規則性などといった「芸術上の蓋然性，客観性」や「実在」としての「生きた抵抗」を纏わせる，制作者の経験としての学びを質的に考察するための視点として，芸術的行為を位置付ける。

なお，ここまでの考察に依拠し，本研究で示した視点である芸術的行為は，造形行為だけにとどまらず，鑑賞行為の過程として実践される，作品を介した制作者と鑑賞者の対話での学びを捉えられる可能性を示唆している。

IV．おわりに

本研究では，制作者が造形行為の過程で実践する造形物との対話を，制作者自身の「対話的な学び」として質的に考察する視点について，バフチンの文献に基づき検討した。これにより，以下の 3 つを考察した。

(i)素材を変化させていきながら，その造形物ないし作品のもつ形や色に対して，想像の世界，モチーフ，何らかの規則性などといった「芸術上の蓋然性，客観性」や「実在」と

しての「生きた抵抗」を纏わせる，制作者と造形物ないし作品との対話の過程。

(ii)作品を見たり，使ったり，味わったりすることによって，作品の形や色が纏う「芸術上の蓋然性，客観性」や「実在」としての「生きた抵抗」を鑑賞者が捉える，制作者と鑑賞者の対話の過程。

(iii)制作者と造形物ないし作品との対話における学びと，制作者と鑑賞者の対話における学びを捉え質的に考察するための視点である芸術的行為。

本研究で示した視点である芸術的行為は文献の調査に基づくため，芸術教育や芸術実践の事例を分析し考察することによって検討してくことが，本研究の知見を発展させることに繋がるといえる。

今後は，芸術的行為に立ち，芸術教育及び芸術実践に関する事例研究により，保育現場や教育現場の「対話的な学び」の深化に貢献する実践研究を課題とする。

付記

本研究は，JSPS 科研費 JP25K16997 の助成で実施した。

註

1) 本研究では，引用文献の内容を正確に表すことを目的に，読み仮名を主とする表記をそのまま記載する。

引用文献

大平修也・松本健義「芸術的行為による身体経験の共有と意味世界の創造に関する研究―美術館での鑑賞行為を事例とした分析考察」『上越教育大学研究紀要』第 41 巻第 1 号，2021，pp.133-147

大平修也・松本健義「中学生の描く芸術的行為による存在との対話と他者との共感的関係に関する研究」『教育実践学論集』第 24 号，2023，pp.1-13

大平修也・茂木和佳子・松本健義「芸術的行為による身体経験の共有と意味世界の創造に関する研究―美術館での鑑賞行為を事例とした分析考察」『上越教育大学研究紀要』第 41 巻第 1 号，2021，pp.133-147

佐藤公治『認識と文化 10 対話の中の学びと成長』金子書房，2014

バフチン(Михаил Михайлович Бахти´н)，伊藤一郎(訳者)『小説の言葉 付：『小説の言葉の前史より』』平凡社，1996

バフチン(Михаил Михайлович Бахти´н)，伊藤一郎・佐々木寛(訳者)『ミハイル・バフチン全著作第一巻［行為の哲学によせて］［美的活動における作者と主人公］他』水声社，1999

バフチン(Михаил Михайлович Бахти´н)，望月哲夫・鈴木淳一(訳者)『ドストエフスキーの詩学』筑摩書房，2002

文部科学省『新しい学習指導要領の考え方―中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ―』文部科学省，2017，2022 年 2 月 21 日閲覧，https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/__icsFiles/afieldfile/2017/09/28/1396716_1.pdf